

フランスにおける恩赦の法制史的研究（八・完）

福田 真 希

はじめに

（一） 恩赦とは何か

（二） 恩赦の研究史

第一章 古代ローマから中世にかけての恩赦

（一） 古代ローマにおける恩赦

（二） 中世の恩赦

（三） 正義と慈悲の対立？

第二章 アンシャン・レジーム期の恩赦

第一節 王令における恩赦

（一） 一六七〇年刑事王令のテキストの問題

（二） 一六七〇年刑事王令における恩赦

（三） 恩赦獲得までの手続き

（以上第三三六号）

(四) すべての慈悲は王より来る

第二節 神の赦しから王の恩赦へ

(一) 冤罪と恩赦

(二) 儀礼と恩赦

(三) ジャン・ボダン『国家論』における恩赦

第三節 フランス王国の形成と恩赦

(一) 恩赦権を与える国王

(二) 支配の道具としての恩赦

(三) 条件付きの恩赦

(四) 国王によらない恩赦

第三章 啓蒙の時代と恩赦

第一節 王権の翳りとパルマン法院の抵抗

(一) パルマン法院の建言と恩赦

(二) ラモワニヨンの改革における恩赦

第二節 恩赦廃止をめぐる対立とイデオロギー

(一) 恩赦不要・廃止論の登場

(二) 恩赦をめぐる言説の交錯

第三節 社会の変化と恩赦

(以上第二三七号)

(以上第二三八号)

(以上第二四〇号)

（一） 恩赦嘆願における変化

（二） 人々による恩赦権の篡奪

（三） 国王への「悪しき言説」と恩赦

第四章 フランス革命からナポレオン期にかけての恩赦

第一節 恩赦の廃止と復活

（一） 恩赦の廃止

（二） 恩赦復活の企て

（三） 恩赦の復活

（四） 恩赦の廃止と復権

第二節 恩赦制度の変化とイデオロギー

（一） 恩赦の廃止と王権

（二） 恩赦される国王

（三） 人民の恩赦から議会の恩赦へ

（四） 恩赦と君主制

第三節 新たな秩序の誕生と赦し

（一） 恩赦の廃止？

（二） 恩赦と大赦

（三） 革命を終わらせるための大赦とその失敗

（以上第二四一号）

（以上第二四二号）

(四) ボナパルト体制の成立と赦し

第五章 恩赦の近代史

(一) 憲法に規定される恩赦権

(二) 一九世紀の恩赦手続き

第二節 一九世紀の恩赦をめぐる思想

(一) 恩赦の脱君主化？

(二) 刑事政策としての恩赦

(三) 一九世紀の恩赦廃止論

第三節 政体の変遷と恩赦

(一) 統計からみる恩赦

(二) 「改革の世紀」における恩赦

(三) 共和制と恩赦

おわりに

(以上本号)

(三) 一九世紀の恩赦廃止論

一九世紀末、恩赦はより法的なものとして捉えられるようになった。タルドによれば、執行猶予や仮釈放は、恩赦から枝分かれしたものであった。¹¹⁾ これは、恩赦が、執行猶予や仮釈放により、代替されうることを意味しているのではない。実際、一八九九年の全国監獄協会では、そのような意見も述べられている。

たとえば、グラニエは、仮釈放は、ほとんどの場合、恩赦に取って代わることができると言った。まず、集团的恩赦について言えば、内務大臣は、恩赦の候補者のリストを各知事に求める際、なぜ、その候補者が仮釈放の対象とはならないのか、理由を示すよう求めている。また、一八八八年の内務省通達も、仮釈放が可能な時には、恩赦よりもそちらを行う方が好ましいと述べている。⁽²⁾次に、個別の恩赦の場合についても、内務大臣は、仮釈放の観点から嘆願書類を検討する方が有益だとしている。⁽³⁾さらに、グラニエは、仮釈放が恩赦の代わりとなることを、歴史的に論証しようとする。彼によれば、復古王政期にも、宗教施設で刑期を過ごし、振舞いが改善しなければ、そこから追い出される条件の恩赦が行われた。また、アンシャン・レジーム期の、ガレー船徒刑からの呼戻しも、監視の下、指定された道を通って、決められた居住地まで行くことを条件としており、さらに、ここで用いられる手形は、仮釈放の書式と類似していると言っているのである。⁽⁴⁾

しかしながら、死刑の場合には仮釈放を用いることはできない。また、ギゾーの議論を思い出すと、恩赦には冤罪を防ぐという意義があり、この目的には、仮釈放では対応することができない。これにたいし、ラルノーは、このような場合には、恩赦ではなく再審を用いればよいと述べた。彼にとって恩赦は、もはや単なる過去の残滓であって、消滅すべきなのである。また、彼によれば、恩赦と仮釈放は、ともに罪刑の均衡を目指しており、これを達成するためには後者の方が優れている。彼において恩赦は、前近代的な法制の採る方法で、さまざまに使用される大ざっぱな道具である。したがって、立法が改良され、より複合的となり、また、その目的により合致する、より専門化された手段ができれば、恩赦は必要ではないと彼は言う。さらに彼は、恩赦は、議会制において一層危険となるとも述べる。というのも、そこでは、大臣たちが、恩赦にかかわることで議員たちに影響力を行使し、議員たちも、選挙民にたいして影響を及ぼすからである。しかも、政治家たちが、司法大臣に

働きかけて、恩赦を得ようとするねらいは、正義とは全く関係がない。こうして彼は、革命期の憲法制定国民議会が、刑罰の平等のために、恩赦を廃止したことに理解を示す。ただ、彼によれば、当時の議員たちは、執行権だけを危険視して恩赦を廃止したが、議会主義体制は、執行権を恩赦から退けることで、その危険を二倍に高めたのである。⁶⁰

再審の存在を考慮に入れた恩赦廃止論は、イタリアでも、新派刑法学の論者たちによって唱えられていた。たとえば、ガロファローは、『犯罪学』（二八八五年）において、裁判における誤りは、再審により正すことができるので、恩赦はもはや必要ないと述べた。彼によれば、諸制度の発展に従って廃止された、さまざまな古い特権よりも、恩赦が長く存続していることは不可解である。しかしながら、彼は、恩赦を完全に否定しているというわけではない。というのも、彼は、もし、例外的な状況に限って、恩赦が行われるのであれば、それは冤罪を正したり、法律を緩和したりする方法として、正当化されうると考えているからである。また、恩赦は本来国家元首による最終審であり、手続きや憲法の分野での検討という点では、維持することもできると彼は言う。さらに、彼が恩赦を否定するのは、普通犯にかんしてであって、政治犯などにたいしては、これを行うこともできるのである。

しかしながら、彼によると、恩赦は今や、仁慈や寛容、あるいは慈悲の行為と考えられており、罪人に与えられた刑罰の有用性や、それを緩和あるいは免除することによる危険には、考慮がなされていない。また、恩赦による釈放の期待があれば、罪人は気楽に次の犯罪を行うので、市民にとって有害である。したがって、政府には、よき裁判によって、その害を埋め合わせる責任があるのである。彼にとって、刑罰は社会的安全（*sicurezza sociale*）からの必要な排除である。ゆえに、恩赦は、犯罪者との接触を避けるという、市民の権利を侵害してい

るのである。

さらに彼は、大赦は恩赦よりも有害であると述べる。というのも、大赦は、例外的な状況に限定されず、多くの人々に、区別なく与えられるからである。また、たとえ同じ犯罪であつたとしても、それが大赦の前日や翌日であれば犯罪とされ、当日であれば無罪の法的擬制がなされる点にも批判を加えている。そのうえ彼は、大赦が刑罰を免除するだけでなく、それが言い渡されたことをも覆すと指摘する。そもそも、一人の意思により、それまであつた犯罪を消滅させ、また、将来の裁判官が、再犯であると言い渡せないようにすることは、想像もできないのである。⁽⁷⁾

ロンブローゾも、再審に言及しながら恩赦を批判している。彼の『イタリアにおける犯罪の増加とそれを止める方法について』（一八七九年）によれば、恩赦権は「不合理で恣意的」である。刑事システムは、論理よりも、社会の差し迫つた必要性に基づいているので、社会の利益という目的を果たすためにも、より迅速な方法を用いなければならぬからである。その利益のひとつは、改善された犯罪者の社会への復帰であるが、それは恣意や濫用なしに行われなければならない。というのも、恣意や濫用による復帰は、犯罪の増加を招くからである。したがって、恩赦を政治犯などに限定するといった、何らかの歯止めを設けることが望ましい。また、冤罪の場合には、恩赦ではなく再審を用いればよい。さらに、大赦も法典から削除されなければならない。なぜなら、これらの制度は、正義の実践にも理論にも反するからである。⁽⁸⁾

執行猶予の導入を理由に、恩赦を批判する論者もいる。たとえば、レンヌ裁判所判事のグラッセリである。彼の『恩赦権』（一八九八年）は、刑事司法を、犯罪そのもののみに注目する客観的なものと、犯罪者の人となりから判断する主観的なものに分類したうえで、恩赦は本来主観的司法に属すると考える。彼によれば、恩赦は、

一種の主観的破棄(cassation)の役割を担わなければならない。すると、恩赦権は、裁判権と同じ者により保有されなければ、存在意義をもたないということになる。ところが、今や恩赦は、国家元首による際限のない気まぐれや不平等、不正義の残滓に過ぎない。しかし、彼によれば、執行猶予制度の成立により、主観的司法と客観的司法はひとつになった。ゆえに彼は、裁判官が、罪人を解放する権限をもつと主張するのである。彼によれば、今や、主権者による恩赦は、裁判官による釈放と二重になるため、不要であり、法律と刑事手続きにおける平等に欠缺をもたらすので、有害であり、そして、単なる好意や気まぐれとなるので、不正義である。つまり彼は、有罪判決を下された者は、裁判によってしか放免されないと考えるのである⁹⁾。

以上のように、一九世紀末の恩赦廃止論は、恩赦に代替する法的手段の存在を、その主張の根拠とした。これらの手段のうち、一九世紀末に導入された、仮釈放や執行猶予の影響は、統計からも見て取ることができる。次節では、一九世紀における恩赦を統計的に考察したい。

注

- (1) *Revue pénitentiaire. Bulletin de la société générale des prisons*, Année 23, 1899, p. 946.
- (2) おそらく、これは、六月二八日の通達のことを指している。それによれば、検事局長は、恩赦を行う際、仮釈放が法的に可能であれば、その可能性について意見を述べなければならない。ただ、メルルによれば、この通達は内務省ではなく司法省で出された¹⁰⁾。Merle, Pierre-Louis-François, *Des causes de cessation des peines, de l'Amnistia, de l'In integrum restitutio damnatorum et de l'Indulgentia, en droit romain. De l'amnistie, de la grâce, de la libération conditionnelle et de la réhabilitation, en droit français*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Poitiers, Poitiers, 1889, p. 182.

- (3) グラニエによると、内務大臣はこの書類を司法大臣から受け取る。しかしながら、セルメは「一部の場合を除いて、個別の恩赦の手続」に内務大臣は関与しないことを述べている。Semet, Ernst, *Le droit de grâce*, thèse pour le doctorat ès-science politique et économique de l'Université de Toulouse, Toulouse, 1901, pp. 240-245, 248-251.
- (4) *Revue pénitentiaire*, pp. 956-957.
- (5) Guizot, François, *De la peine de mort en matière politique*, Paris, 1984, pp. 193-198.
- (6) *Revue pénitentiaire*, p. 938.
- (7) Garofalo, Raffaele, *Criminologia: studio sul delitto, sulle sue cause e sui mezzi di repressione*, Torino, 1885, pp. 291-296.
- (8) Lombroso, Cesare, *Sull'incremento del delitto in Italia e sui mezzi per arrestarlo*, Torino, 1879, pp. 127-128.
- (9) Guérin de la Grasserie, Raoul-Robert-Marie, *Le droit de grâce*, Firenze, 1898, pp. 1-7, 19-20, voir aussi Vrabiesco, George G., *Contribution à l'étude critique du droit de grâce*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Paris, Paris, 1921, pp. 151-153.

第三節 政体の変遷と恩赦

（一）統計からみる恩赦

一九世紀のフランスでは、一八二五年から毎年、『フランスにおける刑事司法行政の一般報告』という統計資料が出されている。⁽¹⁾ この統計には、一八三七年から、集団的恩赦にかんする記録も掲載されている。そこには、恩赦された人数だけでなく、性別の内訳、恩赦の内容、それぞれの流刑地と中央監獄の収容者の数なども記載されている。⁽²⁾ また、一八七三年からは、個別の恩赦の数も収録されており、一八七七年までの五年間については、

集团的恩赦と同様、その内訳まで示されている。本節では、この統計を用いて、一九世紀の恩赦の実態について検討し、最終的には、政体の変遷と恩赦との関係を考えてみたい。

一九世紀の集团的恩赦は、一八一八年二月六日のオールドナンスを原型としている。この法令により、毎年五月一日までに、各知事は、善行と勤勉さのために、恩赦に相当するとされた罪人のリストを、監獄を管轄する、内務大臣に提出することを命じられた。このリストは、内務大臣の考察とともに、司法大臣に提出される。この後、司法大臣は、検事長らにより用意された資料を検討し、聖王ルイの命日である八月二五日に、国王による決定を仰ぐのである。⁽³⁾

ルグーによれば、集团的恩赦は寛容、すなわち、主権の直接的で自発的な発現からなっていた。⁽⁴⁾ 実際、この恩赦は、アンシャン・レジーム期の罪刑消滅と同様、慶事などの場合に行われることもあった。集团的恩赦が行われた日は、その時々々の政府にとって、重要な意味を有していたと言えることができる。復古王政末期には、一八二六年八月一八日のオールドナンスにより、ルイ九世の命日の恩赦が、聖シャルルの日に行われるようになった。⁽⁵⁾ また、七月王政期には、一八三三年四月一三日のオールドナンスにより、国王ルイ・フィリップの即位記念日である、八月九日に恩赦を行うことが定められた。⁽⁶⁾ 第二共和制の時期には、五月四日に恩赦が行われた。この日は、一八四八年の二月革命により解散されていた議会が、復活した日であった。ただ、この恩赦は、一八五〇年までしか行われなかった。その代わりに、帝政開始直前の一八五二年二月一六日、当時まだ大統領だったルイ・ナポレオン（ナポレオン三世）が、叔父ナポレオン一世の誕生日の、八月一五日に恩赦を行うことを定めた。しかも、この日は、年に一度の祝日とされた。⁽⁷⁾ 八月一五日の恩赦は、第二帝政期にも継続して行われている。⁽⁸⁾ 第三共和制期になると、一八八一年からは、一月一日、七月一四日、そして、新大統領選出の時に、恩赦が行われる

ようになった。⁽⁹⁾

集団的恩赦の対象者は、アンシャン・レژیム期と同様、候補者リストから選出された。リストは、初めは体刑・名誉刑と軽罪にたいする刑の二種類に分かれていた。しかし、後にこれらはひとつに統合され、一八三八年一月二〇日の通達により、八項目からなる表となった。この通達によれば、八つの項目は、①候補者の氏名、②有罪判決の理由となった犯罪、③有罪判決の日付、④判決を言い渡した裁判所、⑤刑罰の内容、⑥恩赦当日の時点で残っている刑期、⑦犯罪時の年齢、そして⑧自由考察である。⁽¹⁰⁾ ⑧の自由考察欄には、囚人の振舞いについての情報や、検事長の意見が記入される。その他の欄は監獄で記入された。さらに、監獄からは、個々の受刑者について、どのような恩赦が可能なのか、いかなる資格により恩赦がなされるのかが示された。こうして完成した表は、各県の知事に送付される。知事は、自らの意見を示すとともに、不適当な候補者を削除することができる。続いてこのリストは、内務大臣を経て司法大臣に送付される。司法大臣は、判決を下した裁判所の検事長にリストを渡す。リストを受け取ると、各裁判所の検事局長らは、事件についての報告書を作成する。一連の資料は、第二帝政期には司法省に送付され、第三共和制期には司法省の恩赦部を経て、そこで作成された報告書とともに、司法大臣に送付され、最終決定へと至った。⁽¹¹⁾

集団的恩赦により釈放されたのは、労役刑、懲役刑、拘禁刑の受刑者である。また、有期刑の場合は刑期の半分を、無期刑の場合は一〇年を経過した者が、恩赦の対象となった。ここには、一度恩赦された者も含まれた。その場合は、残された刑期の半分を、経過していなければならなかった。⁽¹²⁾ 死刑の場合には、個別的恩赦のみが与えられた。

図一は、一八三七年から一九〇〇年までの集団的恩赦と、一八七三年から一九〇〇年までの個別的恩赦、そし

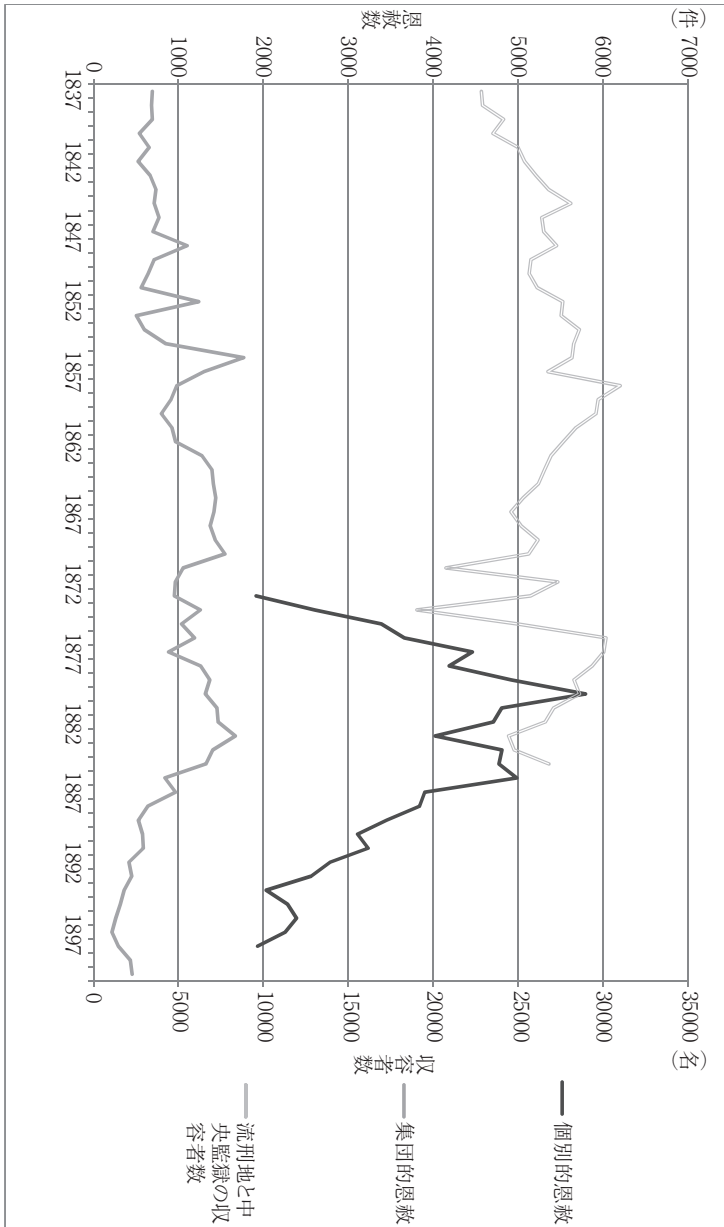


図1 19世紀の恩赦数と収容者数

て、流刑地および中央監獄における収容者数の推移である。まず、集团的恩赦のグラフを見ると、一八四八年、一八五二年、一八五六年の箇所にある山が目を引く。統計によれば、一八四八年の恩赦は、議会による共和制の宣言とともに行われた。⁽¹³⁾ここから、この年の恩赦が、新たな体制の成立を祝賀していたことがわかる。

一八五二年に恩赦数が増加した背景には、おそらく、前述の八月十五日恩赦の成立があるだろう。また、一八五一年以降、『一般報告』は、集团的恩赦の日付を明らかにしていないので、第二共和制の成立時と同様、二月二日の皇帝の即位時にも、祝賀の恩赦が行われた可能性も考えられる。

一八五六年は、参照した期間のうちで、最も多くの受刑者に集团的恩赦が与えられている。この年、フランスはクリミア戦争に勝利した。おそらく、この増加は、戦争の勝利が恩赦により祝されたことを示しているだろう。アンシャン・レジーム期には、兵士の増員のために、恩赦が行われることもあったが、一九世紀には、そのような恩赦の利用はなかったように思われる。というのも、フランスはこの戦争に一八五四年から介入したが、戦争中の恩赦数は、それ以前と比べて増加してはいないからである。また、一八七〇年から七一年にかけての普仏戦争や、一八八四年から八五年にかけての清仏戦争などの時期にも、恩赦数は増加していない。

加えて、恩赦は、刑事施設の収容者数を調整するために、用いられることもなかったようである。⁽¹⁴⁾図一を見る限り、中央監獄や流刑地における囚人の数と恩赦数には、相関関係を見て取ることができないからである。ただ、集团的恩赦の候補者リストを作成する際、各監獄は、収監者全体の一〇%よりも、多くの受刑者を選出することはできなかった。⁽¹⁵⁾

一八九九年の全国監獄協会で、ピコは、それまでの恩赦委員会が機能していなかったことをふまえて発言していたが、実際にはどうだったのだろうか。まず、一八七一年から一八七六年の委員会について見てみよう。

一八七〇年には、一五四七名が集団的恩赦を与えられた。これにたいし、一八七一年には、恩赦を認められた人数は一〇五五名となり、一八七二年には九六四名にまで減少した。一八七四年には、一二〇〇名を超える人々に恩赦が行われたが、一八七五年には、再び一〇〇〇名ほどに抑えられている。ここから、委員会は、ある程度、恩赦の抑制に成功していると言っていることができるかもしれない。ただ、個別的恩赦の数も見ると、委員会はそれほど大きな役割を果たしてはいなかったことがわかる。一八七三年の個別的恩赦は、一九一五名に与えられたが、一八七四年には二六〇三名へと増加し、その数は一八七六年まで上昇し続けるのである。

一八七六年から一八七九年の委員会はどうだろうか。一八七七年には、八八四名に集団的恩赦を与えられた。したがって、前年の一一八九名よりも三〇〇名ほど減少している。ところが、一八七八年には一二六〇名となり、その翌年になると、一三六九名にまで増えている。個別的恩赦も、一八七六年には三六六〇名にたいし行われたが、翌年には、恩赦された人数は四四六〇名となり、さらに、一八七九年には四九二名に至っている。

一方、一八四八年憲法の規定した、コンセイユ・デタによる意見の表明は、恩赦数の抑制に一役買っていたようにも思われる。一八四九年と一八五〇年の集団的恩赦の人数は、それぞれ七一五名と六四三名であり、一八五一年には五六一名となったのである。ただ、七月王政期には、これよりも集団的恩赦の数が少なかった年が、少なくとも二年あった。また、第二共和制期における、死刑囚にたいする恩赦の、毎年平均件数は、七月王政期とほぼ同じであった。一八三〇年に限って、死刑囚にたいする恩赦の数が跳ね上がっていることをかんがみれば、七月王政期よりも、第二共和制期の方が、死刑囚は恩赦されやすかったとさえ言うことができるだろう(図二)。

図一からわかるように、恩赦の数は、一八八六年以降、一転して減少傾向となる。この点については後に述べ

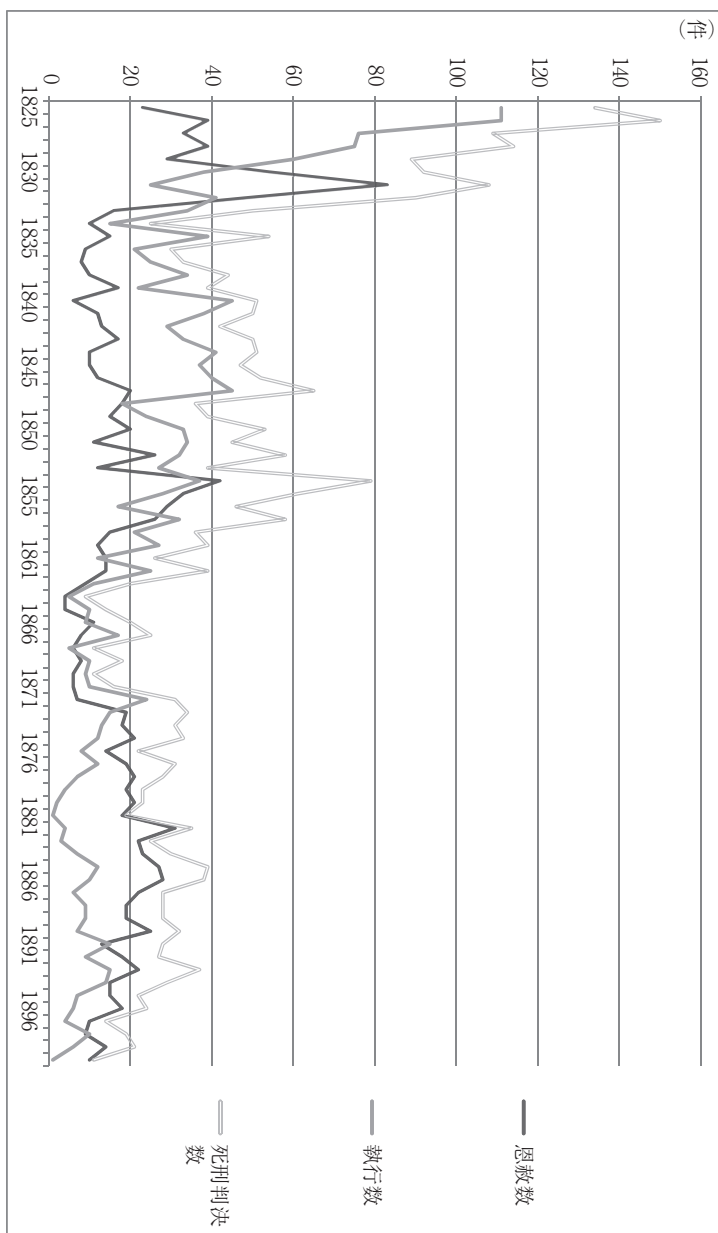


図2 死刑判決への恩赦

ることとして、今度は、刑罰の内容に注目して、集团的恩赦の数の推移を見てみよう。図三によれば、ほぼすべての年において最も多かったのは、拘禁刑にたいする恩赦であった。最も少なかったのは、終身労役刑にたいする恩赦である。拘禁刑は、軽罪にたいし与えられる刑罰であるので、一見すると、恩赦は、軽罪を中心に行われたようにも思われる。ところが、統計によれば、集团的恩赦の大半は、重罪にたいし与えられていた(図四)。ここから、多くの受刑者が、一度別の刑罰を拘禁刑に減刑され、さらに恩赦を与えられていたと推測することができる。

続いて、集团的恩赦の対象となった犯罪に目を向けてみよう。ほぼすべての年で、最も多かったのは窃盗への恩赦であった(図五、六)。それ以外では、殺人、⁽¹⁷⁾傷害、⁽¹⁸⁾性犯罪などの、人身犯への恩赦が多い。一九世紀末、恩赦数が全体的に減少する中で、殺人にたいする恩赦の数の、変動の幅が比較的小さかったことは注目に値する。ここから、一九世紀末になっても、恩赦の伝統的なイメージが根強く残っていたことが見て取れるだろう。

放火や毒殺、背任、詐欺破産、通貨あるいは文書の偽造といった犯罪も、ほとんど毎年恩赦の対象となっている。これらの犯罪の中では、文書偽造への恩赦の数が多し。その他の犯罪への恩赦は、少ない年では一〇件に届かず、多い年でも五、六〇件程度である。墮胎や嬰兒殺といった、女性に多い犯罪も、⁽¹⁹⁾多くの年で恩赦の対象となっている(図七)。墮胎への恩赦の数は、多い時でも年に一〇数件であったが、嬰兒殺への恩赦は、多い時では年に一〇〇件を超えることもあった。

嬰兒殺への恩赦は、一八六三年を境に増加している。それ以前は、この犯罪への恩赦は、年に五〇件を超えることはめったになかった。このような増加は、集团的恩赦の数全体にも見て取ることができる。実は、この年、刑法の改正が行われ、いくつかの重罪が軽罪へと改められた。また、恩赦の数が減少し始めた一八八〇年代半ば

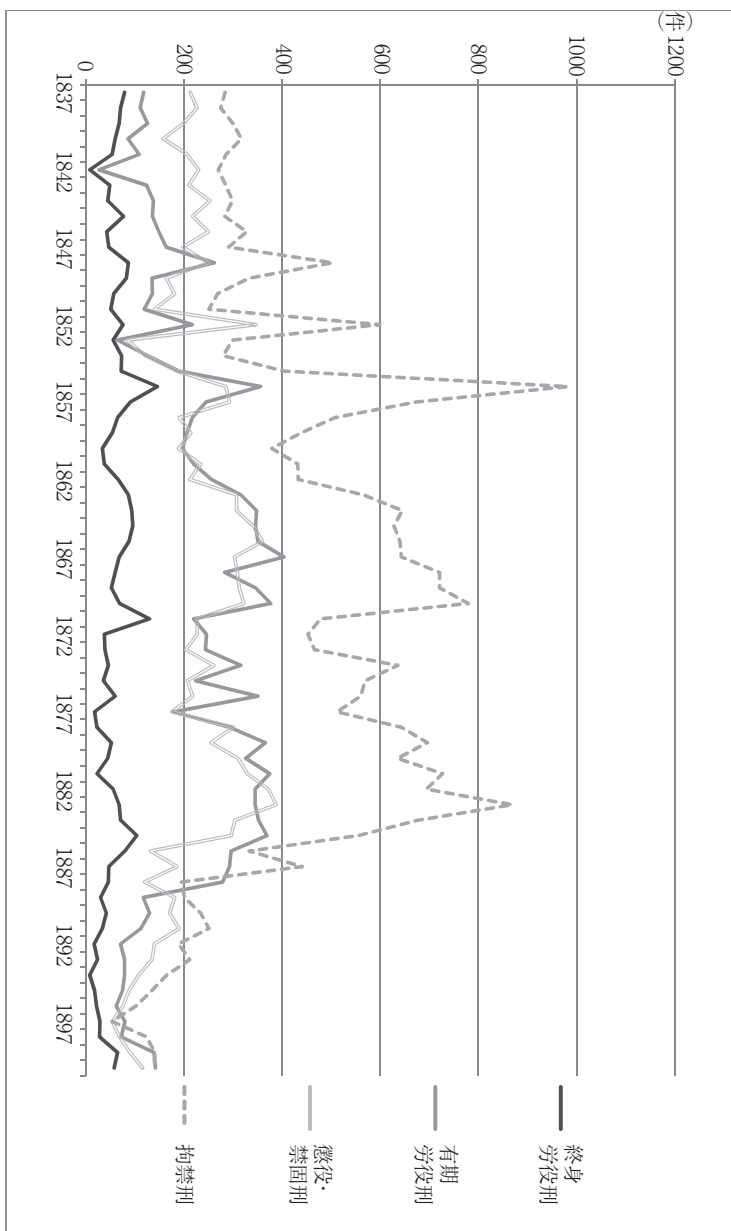


図3 集団的恩赦の刑罰別内訳

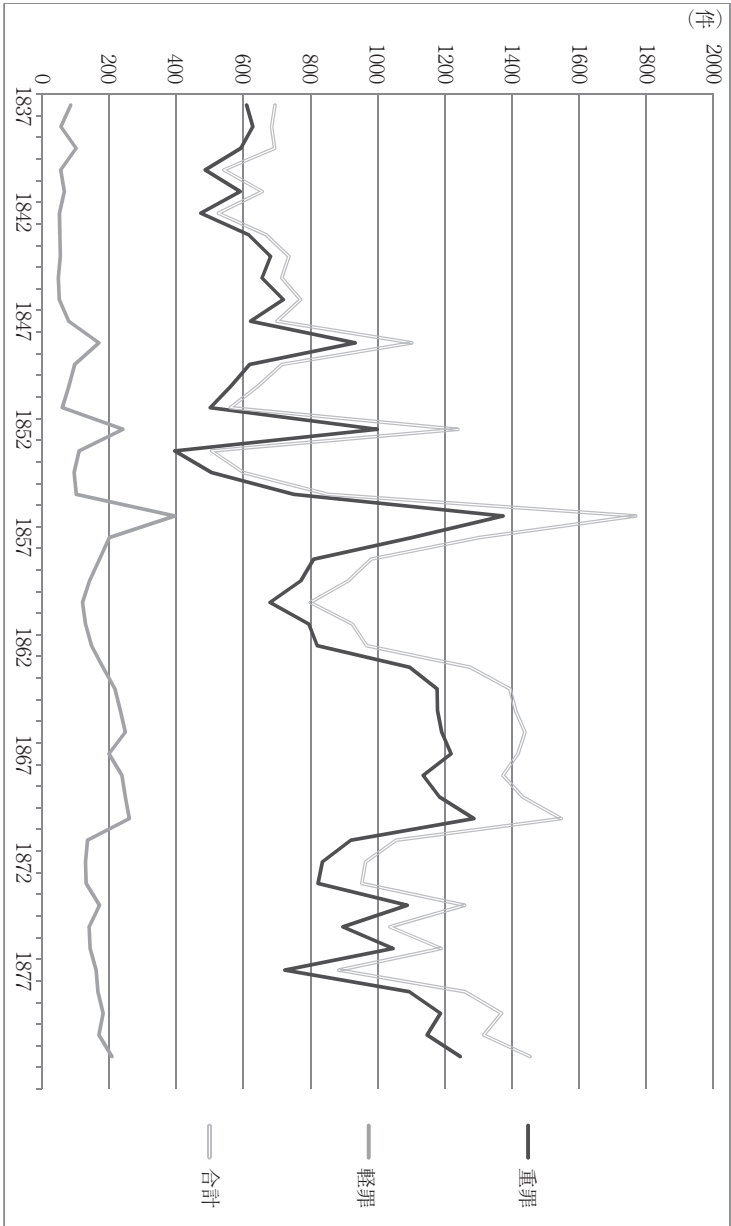


図4 集団的恩赦における軽罪と重罪の数 (1837年～1881年)

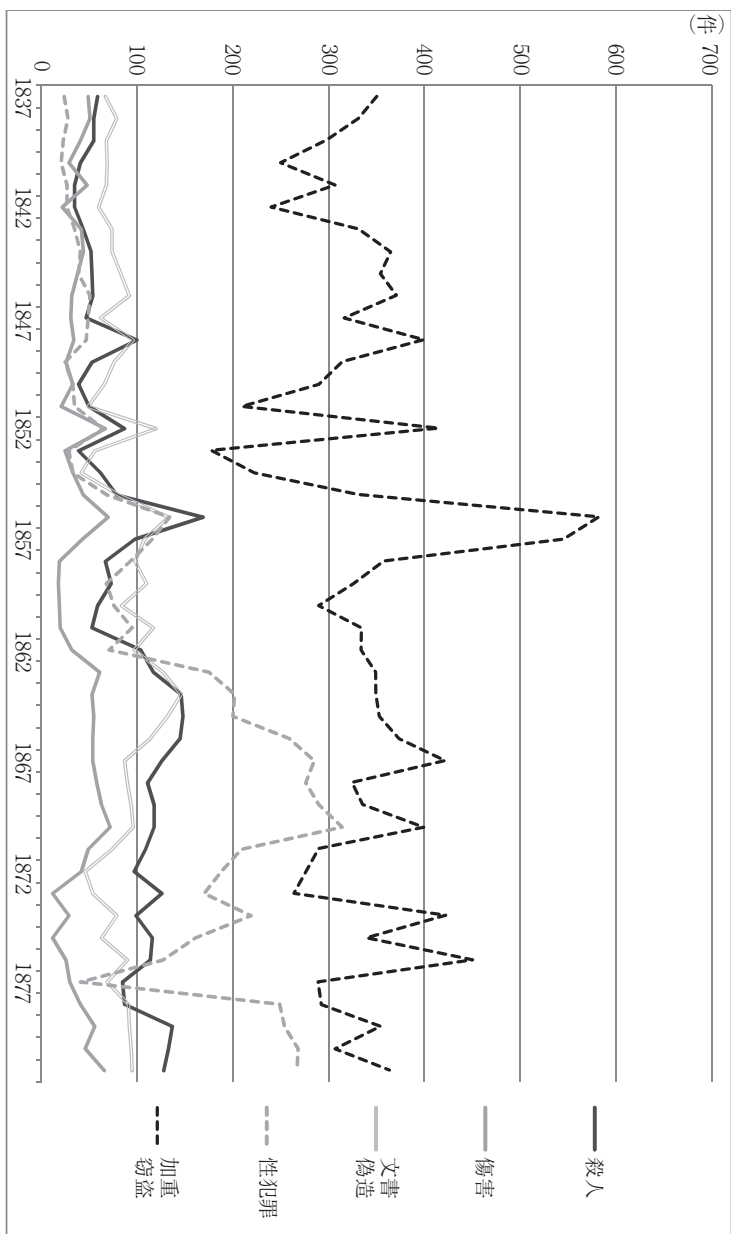


図5 集団的恩赦の対象となった主な重罪 (1837年～1881年)



図6 集団的恩赦の対象となった主な犯罪 (1882年～1900年)

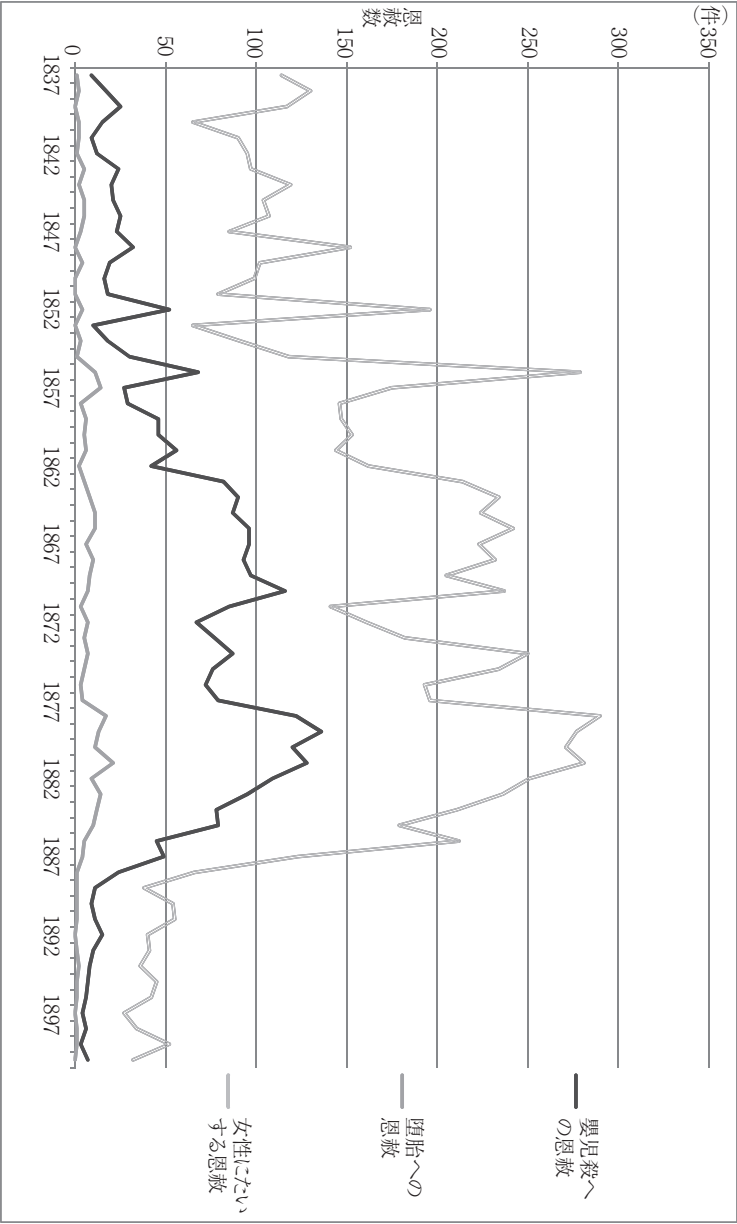


図7 集団的恩赦と女性

には、仮釈放制度が成立している。カルバツスは、一九世紀は刑法の「改革の世紀」であつたと述べたが、このような改革は、恩赦に何らかの影響をもたらしたのだろうか。⁽²¹⁾

(二)「改革の世紀」における恩赦

一八一〇年刑法典の制定以来、初めて行われた重要な改正は、一八二四年六月二五日の法律による、酌量減刑の導入である。⁽²²⁾ただ、この法律は、酌量減刑の対象となる犯罪を限定しており、さらに、減刑を決定するのは重罪院の裁判官に限られていたため、それが認められないこともあつた。というのも、この制度の目的は、陪審による無罪の評決の回避だったからである。一八一〇年刑法典は、重罪にたいする刑罰を厳密に固定化していた。⁽²³⁾そのため、陪審員たちは、犯罪の状況を考慮した結果、法定刑が厳しすぎると判断した場合、有罪相当の事件にも無罪の評決を下した。一方、裁判所の側は、法定刑の重さをあからさまに懸念した場合には、偽証罪に問うとして、陪審員たちに圧力をかけたのであつた。⁽²⁴⁾一八二四年の法律以後も、陪審による無罪の評決は続いたため、一八三二年四月二八日の法律により、酌量減刑の可否を判断する役割は、陪審に与えられた。⁽²⁵⁾さらに、この法律は、一〇の犯罪について死刑を廃止した。⁽²⁶⁾その結果、一八三一年には三七%だった無罪率は、二五%程度にまで低下した。⁽²⁷⁾

このような改正は、恩赦にいかなる影響を与えたのだろうか。集団的恩赦にかんしては、管見の限りでは明らかではない。しかしながら、個別的恩赦について言えば、死刑判決への恩赦が、一八三三年には、前年の約三分の一に減少している(図二)。一八三三年には、四九名の死刑囚に恩赦が与えられたが、一八三三年には一六名、さらに、一八三四年には一〇名となっているのである。死刑判決それ自体も、一八三二年には九〇件であつた

が、一八三三年には五〇件、一八三四年には二五件に数を減らしている。⁽²³⁾

陪審による無罪の評決の問題は、一九世紀の一連の改正におけるキーワードである。たとえば、陪審員の選任方法は、徐々に厳格な形へと変更された。⁽²⁴⁾ また、一部の犯罪を陪審制の対象外とすることで、そもそも、陪審員の介入を阻止するという方策も取られた。そのひとつが、一八六三年五月一三日の法律による、一部の重罪の軽罪化であった。⁽²⁵⁾ これにより、二〇の重罪にたいする刑罰が拘禁刑に改められた。こうして、第二共和制の頃には、四〇％にまで上昇した無罪率は、第二帝政末期からパリ・コミューンにかけての時期には、二〇％まで減少した。⁽²⁶⁾

一八六三年の法律は、一見すると、恩赦にも影響を与えているように思われる。一八六二年から六三年にかけて、集団的恩赦の数が約一・三倍に増加しているのである（図一）。しかも、これ以降、一八八六年まで、毎年之恩赦数は高い水準を保っている。しかしながら、この時に数を増やしたのは、重罪にたいする恩赦であって、軽罪にたいする恩赦の数に大きな変動はなかった（図四）。また、刑罰別の内訳を見ると、拘禁刑以外の刑罰にたいする恩赦も、この時に増加していることがわかる（図三）。

一八八六年に集団的恩赦の数が減少したのは、おそらく、一八八五年八月一四日の法律が、仮釈放を導入したことと関係しているだろう。この法律は、復権の制度の改正も含んでおり、悔い改めた受刑者を社会に戻し、再犯を防ぐことを目的としていた。⁽²⁷⁾ 一八九一年三月二六日の法律による、執行猶予の導入も、再犯の防止を目的としていた。⁽²⁸⁾ この法律によると、軽罪を行った者が初犯であれば、五年間の執行猶予を与えられ、その間に再び罪を犯した場合には、初めの犯罪と次の犯罪にたいする刑罰が、それぞれ与えられた。また、重罪の場合にも、刑が終わった後か時効が成立した後、五年以内に再び犯罪を行った場合、犯人はより重く罰せられた。⁽²⁹⁾

これらの制度による影響を具体的に見てみると、一八八五年には、一三二四名に集団的恩赦が与えられたが、翌年には八四一名にまで減少している。一八八七年には、集団的恩赦の数は一〇〇件ほど増加するが、それ以後は少しずつ数を減らし、一八九〇年には五七七名、一八九一年には五八七名、一八九二年には四一七名となる。そして、一八九七年には二一七名にまで落ち込んだ。

個別的恩赦の数を見ても、一八八六年には、前年の四七七四名と比べて、およそ二〇〇名増加したものの、一八八七年になると、そこから約一〇〇〇名減少して三九〇一名となる。一八九〇年には三一〇八名、一八九一年には三三三五名に恩赦が与えられ、一八九二年になると二七八七名にまで減少する。そして、一八九八年には二〇〇〇名を下回るのである(図一)。

ここから、一九世紀、恩赦は受刑者の改善や、刑の個別化のために用いられていたと行うことができる。恩赦のこのような意義は、とりわけ、第三共和制の時期に、顕著に表れていたと考えられる。というのも、第二帝政の崩壊後に、集団的恩赦における、減刑の割合が上昇しているからである(図八)。減刑の割合が最も高くなるのは、第三共和制憲法が成立した一八七五年である。それ以後、この割合は緩やかに下降するが、全体的に見れば、第三共和制期は、それ以前と比べて、恩赦による減刑の割合が高くなっているのである。

ゆえに、今や恩赦は、一度に多くの囚人を釈放することで、政府の寛大さを華々しく表現する役割よりは、改善した犯罪者に、釈放の日を予定よりも早めるという褒美を与えることで、彼らの変化を促す役割を担っていると考えることができる。この時、恩赦の可否を判断するために重要なのは、犯罪の内容それ自体よりもむしろ、刑事施設における受刑者の振舞いである。また、これを評価するのは、彼らを日々監視する監獄である。赦しを与える者が、権力をもつ者と一致するのであれば、ここで真の権力を行使しているのは、そのような末端の機関

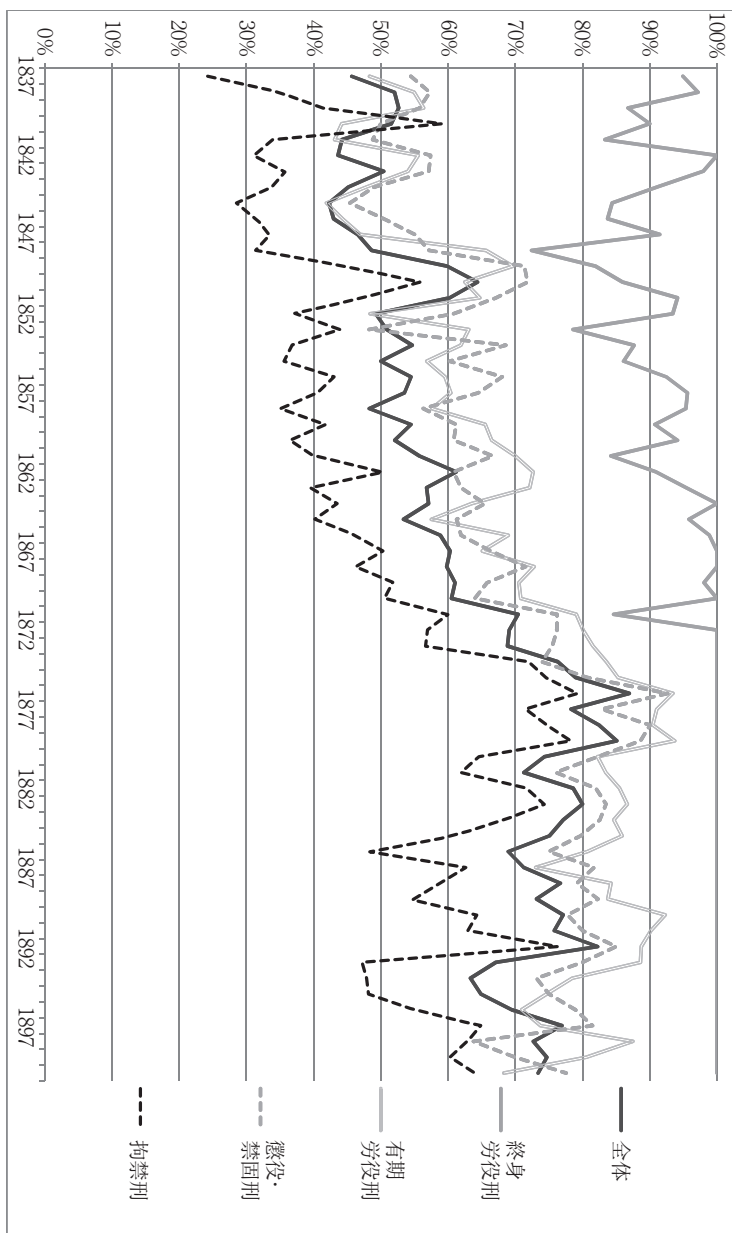


図8 集団的恩赦における減刑の割合

であると言うことができるかもしれない。しかしながら、重要なのは、再審や仮釈放、あるいは執行猶予とは異なり、恩赦は、あくまで国家元首の名の下に与えられる慈悲だということである。また、おそらく、そのことが、これらの法的手段の存在にもかかわらず、恩赦が存続した理由のひとつなのではないだろうか。

(三) 共和制と恩赦

これまで、統計を用いて、一九世紀の恩赦について検討してきたが、それによれば、恩赦は、しばしば前近代的な制度だと批判されていたにもかかわらず、世紀後半に広く用いられていた。とりわけ、第三共和制の時期には、恩赦を抑制する制度が設けられたにもかかわらず、仮釈放や執行猶予の導入まで、毎年多くの受刑者に恩赦が与えられた。かつて、モンテスキューは『法の精神』において、恩赦は君主制と親和的であり、共和制においては、それほど必要ではないと述べたが、⁽⁸⁵⁾ 実際には、共和制こそが、恩赦と親和的なのではないだろうか。

たしかに、統計を見る限り、一年あたりの集団的恩赦の数が最も多かったのは、第二帝政期であった。この時代には、毎年、平均しておよそ一一六〇名に集団的恩赦が与えられた。一方、第三共和制期においては、一年あたり、九〇〇名弱にとどまっている。ただ、仮釈放導入前に限って言えば、一年あたりの平均値はおおよそ一二四〇名となる。さらに、個別的恩赦について見ると、一八七三年を境に、死刑判決にたいする恩赦の数が、実際の執行の数を上回るようになったのである(図二)。⁽⁸⁶⁾

第二共和制期には、議会の復活と同時に、多くの人々に恩赦が与えられた。さらに、二月革命により共和制が宣言された二月二五日から、五月五日までのおよそ二ヶ月の間に、少なくとも六回の大赦が行われている。⁽⁸⁷⁾ この大赦は、議会ではなく、一人名からなる臨時政府により行われた。というのも、議会の復活まで、臨時政府が立

法権と執行権の両方を担っていたからである。このような、不安定な時期に大赦が多く行われたことは、政府が革命による混乱を一度清算し、新たな秩序を作り上げようとしたことを表しているだろう。

革命後に大赦が何度も行われたという点では、七月王政も共通している。『フランス法事典』（一八八八年―一九〇六年）によると、七月王政が成立した一八三〇年には、七月革命により復古王政が崩壊した八月二日から、一〇月一日まで立て続けに一一回の大赦が行われた。⁽³⁸⁾ただ、この事典によれば、第二共和制期と七月王政期の毎年の大赦の平均数はほぼ同じである。すなわち、第二共和制期は一年あたり約二・二六回の大赦を行ったのにたいし、七月王政期は約二・三六回であった。

『フランス法事典』によると、第二帝政や第三共和制の成立時にも、大赦が行われている。また、図一によれば、第三共和制が宣言された一八七〇年にも、集团的恩赦の数が上昇している。この年の集团的恩赦の数は、調査期間を通じて三番目に多かった。実は、集团的恩赦の数が多かった年は、第三共和制期に集中している。二番目に多くの集团的恩赦が行われたのは、一八八三年であった。四番目は、一八八二年である。一方、仮釈放導入以前で、集团的恩赦の数が少なかった年は、君主制の時期に集中している。最も小規模な集团的恩赦が行われたのは、第二帝政期の一八五三年であった。二番目と三番目に少なかったのは、七月王政期の一八四二年と一八四〇年であり、四番目によく、第二共和制期の一八五一年が登場する。ちなみに、ティエールによれば、この年の一月三日に、反大統領派のシャンガルニエ将軍が罷免されたことをもって、「帝政が樹立された」⁽⁴⁰⁾。また、一二月二日には、ルイ・ナポレオンによるクーデタが行われ、事実上、第二共和制は終焉を迎えたのであった。⁽⁴¹⁾

以上から、モンテスキューの言葉は、必ずしも自明ではなかったと言えることができる。むしろ、君主というわかりやすい正当化根拠をもたない共和政体こそが、自らの存在を正当化するために、「神の権利」に頼ったと言

うことができるかもしれない。⁽⁴⁾

一九世紀、政体や法制の変遷の中で、恩赦は一方では法的性格を強め、他方では政治的性格を維持した。そういった意味では、一八九九年九月一九日、ドレフュス事件に、恩赦によりいったん区切りがつけられたことは示唆的である。⁽⁴⁾ この年の六月四日、破棄院はドレフュスの有罪判決を破棄し、軍法会議へ移送した。ところが、九月九日に再び有罪判決が下されたため、政府は恩赦に踏み切ったのであった。この頃、ドレフュス有罪の証拠のひとつとなった書簡の偽造が明らかとなり、ゾラをはじめとする、ドレフュスの無罪を主張する人々の活動が、実を結びつつあった。したがって、この恩赦は、ドレフュスの有罪に疑いが差し挟まれたにもかかわらず、軍部の政治的判断により、原審判決が維持されたことにたいする反論を意味している。つまり、この恩赦は、政治的判断により歪められた法的事実を、政治的判断により正そうとしたと言えるのである。

注

- (1) *Compte général de l'administration de la justice criminelle en France, 1827-1902.*
- (2) ただししばしば記述されている項目が変更されており、年によっては把握できない情報もある。
- (3) Duvergier, J.-B. (éd.), *Collection complète des lois, décrets, ordonnances, règlements, et avis du Conseil d'État*, t. 21, Paris, 1827, pp. 366-367.
- (4) Legoux, Jules, *Du droit de grâce en France comparé avec les législations étrangères, commenté par les lois, ordonnances, décrets, lettres patentes, déclarations, édits royaux, arrêts de parlements, de la Cour de cassation et de Cours impériales, avis du Conseil d'État. Décisions et circulaires ministérielles, instructions de l'administration de l'enregistrement, etc. Depuis 1349 jusqu'en 1865*, Cotillon,

- 1865, p. 54.
- (5) *Ibid.*, p. 177. 具体的な日付や「聖シャルル」については明らかではない。
- (6) *Ibid.*, p. 54. ただし、ルグーは、別の箇所では、一八二六年と一八三年のオールドナンスのことを通達と述べている。voir *Ibid.*, pp. 177, 185.
- (7) *Ibid.*, p. 200; voir aussi Duvergier, *op. cit.*, t. 52, p. 110.
- (8) Legoux, *op. cit.*, p. 54.
- (9) Ruilleau, Charles, *De la grâce en droit constitutionnel*, thèse pour le doctorat soutenue devant la Faculté de droit de Bordeaux, Bordeaux, 1911, p. 54. voir aussi Conan, Matthieu, Amnistie présidentielle et tradition, *Revue du droit public*, n. 5, 2001, p. 1328.
- (10) Legoux, *op. cit.*, pp. 54–55, 278.
- (11) *Ibid.*, pp. 56–59; Sernet, *op. cit.*, pp. 246–249.
- (12) Legoux, *op. cit.*, p. 55.
- (13) *Compte général de l'administration de la justice criminelle en France pendant l'année 1848*, Paris, 1850, pp. 288–289.
- (14) 現代のフランスでは、このような目的のために恩赦が行われることもある。渡邊文幸「法務省検察庁研究―恩赦制度と運用―」『月刊官界』第三三巻第七号、一九九七年、二七一ページ。
- (15) Sernet, *op. cit.*, p. 246.
- (16) 一八八二年から、重罪と軽罪は区別なく記載されるようになった。しかしながら、突然恩赦の傾向が変わることは考えにくい。したがって、一九世紀末になっても、それ以前と同様、重罪を中心に恩赦が与えられていたと推測できる。
- (17) 殺人には、故殺・謀殺・尊属殺とその未遂が含まれる。

- (18) 傷害致死も含まれる。
- (19) 強姦あるいは強姦未遂のこと。
- (20) いくわずかではあるが、これらの犯罪にかんし、男性も恩赦されてゐる。
- (21) Carbasse, Jean-Marie, *Histoire du droit pénal et de la justice criminelle*, Paris, 2000, p. 405.
- (22) Duvergier, *op. cit.*, t. 24, p. 517.
- (23) Carbasse, *op. cit.*, p. 408.
- (24) Gruel, Louis, *Pardons et châtimens*, Paris, 1991, p. 23.
- (25) Duvergier, *op. cit.*, t. 32, pp. 217-219. 中村義孝編訳『ナポレオン刑事法典史料集成』法律文化社、二〇〇六年、三三八―三三九ページ。
- (26) Astruc, Philippe et al., *L'abolition de la peine capital en France (9 octobre 1981)*, Paris, 2011, pp. 43-44.
- (27) Gruel, *op. cit.*, p. 25.
- (28) Astruc, *op. cit.*, pp. 99, 112.
- (29) Alline, Jean-Pierre, *Gouverner le crime. Les politiques criminelles françaises de la Révolution au XXI^e siècle. 1. L'ordre des notables 1789-1920*, Paris, 2011, pp. 81-82.
- (30) Duvergier, *op. cit.*, t. 63, pp. 418-488.
- (31) Gruel, *op. cit.*, pp. 27-28.
- (32) Alline, *op. cit.*, pp. 201-202.
- (33) Duvergier, *op. cit.*, t. 91, pp. 54-60. 中村前掲書、一七一一―一七三三ページを参照。

- (34) Allinne, *op. cit.*, p. 202.
- (35) *Œuvres complètes de Montesquieu*, t. 1, Paris, 1758, réimpression, publiée sous la direction de M. André Masson, Paris, 1950, t. 1, p. 126. モンテスキュー『法の精神（上）』野田良之ほか訳、岩波文庫、二〇〇八年、一九四ページ。
- (36) Astuc et al., *op. cit.*, p. 109.
- (37) Conan, *art. cit.*, p. 1310, note 25.
- (38) *Repertoire général alphabétique du droit français*, publié sous la direction de Ed. Fuzier-Herman, t. 3, Paris, 1888-1895, p. 152. 『フランス法事典』によれば、復古王政成立時には、大赦はそれほど多くは行われていない。ただ、百日天下後の一八一六年に、ルイ一六世の裁判で死刑に賛成した者や、百日天下に関与した者を除く、「反逆とナポレオン・ボナパルトの篡奪」に関与した者すべてを対象とする、大赦が行われていることは、注目に値するだろう。この大赦法については、遅塚忠躬「王政復古期の「国王弑逆者」」『フランス革命とヨーロッパ近代』同文館出版、一九九六年、を参照。
- (39) *Repertoire général alphabétique*, pp. 152-154.
- (40) *Discours parlementaires de M. Thiers*, publié par M. Calmon, troisième partie (1850-1864), t. 9, Paris, 1880, p. 114.
- (41) 柴田三千雄ほか編『世界歴史体系 フランス史 3—一九世紀半ば—現在—』山川出版社、一九九五年、一〇〇—一〇一ページ。
- (42) voir Viaud, Jean, *Le droit de grâce à la fin de l'Ancien Régime et son abolition pendant la Révolution*, thèse pour le doctorat en droit de l'Université de Paris, Paris, 1906, pp. 178-179.
- (43) ドレフュス事件については、渡辺一民『ドレフュス事件 政治体験から文学創造への道程』筑摩書房、一九七二年、を参照。

おわりに

本稿では、古代ローマから一九世紀に至るまでの、フランスにおける恩赦の歴史を、法制・思想・実態の三側面から、主権とのかかわりの中で考察した。このような多面的な考察により、三つの側面は、時に齟齬をきたしながらも、密接に関係しあっていたことが明らかとなった。以下に、本稿における考察を簡単にまとめておく。

古代から、恩赦は「神の権利」と考えられてきた。この「神」とは、初めはローマの土着の神であった。しかしながら、キリスト教の普及とともに、恩赦はキリスト教的な性格を帯びるようになった。中世になると、恩赦権は、競合する諸権力間の勢力争いに巻き込まれた。というのも、この権利は「神の権利」であり、また、赦しを与えることは、赦される側にたいする優位を意味したからであった。この勢力争いに勝利したのが、王権であった。絶対王政期には、王権により恩赦権が独占されるに至り、ルイ一四世期の一六七〇年刑事王令により、恩赦は初めて体系的に立法化された。

アンシャン・レژیム期における恩赦は、王権の伸長を支える手段であった。王権は、過酷な身体刑により、人々に恐怖を与えることで服従を手に入れると同時に、処刑を執行人の手に委ね、恩赦の時にだけ、恩赦状という形で人々の前に登場し、「赦しを与える神」の座を手にしたのであった。このような考えは、当時の思想にも共有されていた。近代的主権概念を確立したボダンは、『国家論』において、恩赦権を「主権のしるし」とする一方で、刑罰権は司法官に委ねられるべきであると説いたのである。

また、恩赦は、国王による支配の道具として用いられた。王権は、諸侯を懐柔するために恩赦権を与えたり、新たに王国に編入された土地の人々の支持を得るために、各地を巡回し入市式で恩赦を行ったりした。また、王

権は、恩赦を通じて、人々を「よきフランス人」のひな型にはめこんでいった。

啓蒙期になると、王権の衰退とともに、恩赦への抵抗が見られるようになった。パルルマン法院は、建言権を利用し、国王による恩赦に意見するとともに、恩赦嘆願を促進する改革にもノンを突き付けた。人々も、刑罰が厳しすぎると考えた時には、処刑台の下で恩赦を求め、暴動を起こすこともあった。また、彼らは、国王の慈悲を希うというよりも、自らの無実を訴えたり、責任を回避したりするために恩赦を嘆願するようになった。ベッカリニアによる恩赦廃止論が唱えられたのも、ちょうどこの頃であった。

しかしながら、啓蒙期のこのようなできごとは、フランス革命による王政の廃止を予告していたわけではなかった。パルルマン法院は、国王の恩赦権それ自体を否定したのではなく、恩赦による裁判の妨害に抵抗したに過ぎなかった。人々も、国王の「正義」にたいする不信を露わにする一方で、国王の慈悲を信じ、恩赦を求め続けた。そして、恩赦廃止論を唱えた啓蒙思想家たちも、確実に緩和された正義に基づく完全な刑法の、完璧な執行を望んでいただけであった。

フランス革命が始まると、一七九一年刑法典により、重罪にたいする恩赦は廃止された。この廃止は、翌年の王権停止と、直接的な関係を有してはいなかった。恩赦の廃止は、啓蒙期の恩赦廃止論が受け入れられた結果であった。革命期の議員たちによれば、恩赦は、法律の厳格な執行を妨げるので、廃止されるべきであった。また、彼らは、刑法典と陪審制の成立により、恩赦による修正を必要としない、完璧な刑事裁判が可能になったと考えていたのである。

ところが、恩赦と主権の結びつきは、完全に絶たれてはいなかった。一七九三年の国王裁判の時期には、人民による、国王への恩赦に言及したパンフレットが出版された。恐怖政治期になると、議会による恩赦権を想定し

た議論も見られた。しかも、一七九一年をもつて、恩赦は、完全にフランスから姿を消したわけではなかった。恩赦の廃止直後から、議会では恩赦の復活が提案されたのである。さらに、革命議会は、恐怖政治の終焉など、革命の節目で「大赦」を行った。また、恩赦の廃止後も、事実上恩赦は行われていた。ただ、本稿では、国王による恩赦以外については、ほとんど議論することができなかった。この点は、今後の課題とすることができるよう。ともあれ、共和暦一〇年（一八〇二年）に、ナポレオン・ボナパルトが、終身第一執政となるとほぼ同時に、恩赦は復活した。

一九世紀には、恩赦は憲法に規定されるようになり、政体の変遷とともに形を変えた。その中で、恩赦は旧来的なイメージを保ちながらも、ますます法的なものと捉えられるようになった。実際、恩赦は刑罰の個別化のためにも用いられた。一九世紀末に、仮釈放や執行猶予が導入されると、これらの制度を根拠に、恩赦廃止を求める声が上がった。それでも、恩赦は廃止されることはなく、かつて国王に割り当てられた執行権の一部として、現代まで存続することになる。このように、恩赦の歴史は、権力や刑法の歴史と深い関係を有している。つまり、恩赦は権力の属性として、あるいは刑罰の対極として、それらとともに歩み続けてきたのである。

恩赦と権力、あるいは刑罰の関係が、最も劇的な形で現れるのは、アンシャン・レジームにおける、処刑直前の恩赦の場面であろう。刑死を目前にした受刑者への恩赦は、人々の目に、国王の生殺与奪の権を焼き付けたはずである。本稿では、処刑直前の恩赦にかんする事例をいくつか取り扱ったが、今度は処刑の場に焦点を置き、刑罰と恩赦の両方の視点から、権力の空間を考察したいと考えている。

ただ、恩赦を与える「権力」は、必ずしも君主のそれを意味しない。フランス革命期、恩赦を廃止した革命議会は、革命を終わらせ、新たな秩序を誕生させるために大赦を行った。彼らは恩赦を廃止したが、自分たちの築

いた体制を正当化するためには、結局のところ、「神の権利」である赦しが必要だったのである。このことは、一九世紀における赦しの実態からも、見て取ることができるだろう。

そうだとすれば、二〇〇八年二月三日の、サルコジ大統領による恩赦は、「君主の行い」と言うよりはむしろ、「共和的」であったのかもしれない。

（本研究は平成二三年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の補助を受けた研究の一部である。）